

天野栄造による西部組合の満州伝道と 満州伝道会に関する一考察

— 日本基督教団加盟との関連から —¹

金丸英子

はじめに

日本バプテスト連盟は、第二次世界大戦敗戦後間もない1947（昭和20）年4月3日に結成された。南部バプテストの流れを汲む旧西部組合の16の教会が代表者を送り、西南学院教会で創立総会が執り行われた。その前身とも言うべき「日本浸礼組合教会西部組合」は、1940（昭和15）年、現在の日本バプテスト同盟の前身である東部組合と合同して「日本バプテスト基督教団」と名乗り、翌年1941（昭和16）年に日本基督教団に加盟し、以後「日本基督教団第四部」として存在した。戦中も伝道活動は保たれたが、日本基督教団の一部であったため、伝道方針や伝道活動は日本基督教団の路線に則ったのは当然のことである。

日本基督教団の誕生自体は、1939（昭和14）年1月18日に当時の平沼内閣が議会に提出し、難なく通過成立した「宗教団体法」を意識し、それに追従することを旨としたため、その伝道理念には天皇を頂点とした国体護持を標榜する国家主義が色濃く影を落としていたのは言うまでもないことである²。

1 本稿は、2013年8月に行われた「日本バプテスト連盟全国壮年会連合大会」の模擬授業の内容を論文として加筆し、整えたものである。

2 教団の性格は、概ね「宗教団体法の定めに従って自らの規則を作り、体制を整える」ものであったとすることができる。（日本基督教団史編纂委員会編、『日本基督教団史』、1967年、107-109頁）

そもそもバプテストはその誕生から、教会と国家の間に一線を画し、信教の自由、政教分離といった主張を全面に押し出すことを以て教派のアイデンティティーを自負していた教派である。それ故に、ヨーロッパ、アメリカにおける初期のバプテストの中には、信教の自由を求めて殉教の死を遂げた者たちも存在する。しかしながら、日本のバプテストの場合、当時の他の多くのプロテスタント諸派がそうであったように、日本基督教団という大樹に連なり、それによって国家権力の迫害の対象となることなく戦中を生き延び、戦後の歩みを始めたと言っても過言ではないであろう。

大戦前夜のキリスト教と国家の間に横たわっていたこのような強い結びつきの姿が明確に表れているのは、1940（昭和15）年、青山学院で行われた「皇紀2600年奉祝全国基督教信徒大会」であろう。出席者は国の内外から約2万人を超え、内閣総理大臣近衛文麿、東京市長、東京都知事、文部大臣らが祝辞を寄せるという国家色満載の催し物で、宮城遥拝、君が代で始まり、「大会宣言」が宣言され、頌栄、祝祷の後、万歳奉唱で閉じられている（資料1）。そこで捧げられた祈祷、語られた説教には、当時盛んに使われた国家主義的なフレーズが並んだが、それは海外伝道に関しても同様で、「八紘一字」、「大東亜共栄圏」といった国家による植民地政策の用語が頻繁に使われている。当時の日本はその植民地思想と共に朝鮮半島、中国、東南アジアの近隣諸国に入って行くが、キリスト教会もそれに沿って、宣教師や牧師を派遣することでこれら諸地域に入っていった。この海外における伝道活動を統括したのが日本基督教団であった。

しかしながら、このような日本の教会による海外伝道の働きは、日本基督教団という宗教団体の誕生以前から教会の間ですでに始められていた。その代表格は1933（昭和8）年6月に富士見町教会の信徒を中心にして始まった「満州伝道会」であろう。この組織は後に「東亜伝道会」と名称を変え、日本基督教団創立後は「日本基督教団東亜局」となって近隣諸国における伝道活動を行っている。実は、この働きにバプテストが深く関係していた事実がある³。このことは、当時の日本のバプテストが、海外でも国との関わりにおいて伝道活動を展開していた事実を示唆するものである。

満州伝道会の活動を辿る中で明らかになるのは、当時の日本の教会の海外伝道は、満州を中心にして広がり、その後も国の植民地政策と共に進展して行った軌跡である。確かにこのような活動地域は、戦況の進展に伴い、日本基督教団東亜局を通して広げられてはいる。しかし、それは満州伝道会という具体的な働きの下地があつてのことであつた。これに我々バプテストの先達たちもその末席を占めていた事実は記憶されなければならない。それにもかかわらず、現存の歴史記述においてが該当部分は5頁にも満たず、その終了に関しては、わずか2行半で記述が終えられている。本稿では、バプテストの日本基督教団加盟前に、西部組合の外国宣教師として大連に派遣された天野栄造と、その伝道の始まり、活動の様子、終息という天野の足跡を通して、戦前・戦中の日本のバプテストの歴史の一端を知ろうとするものである。

1. 天野栄造略歴

日本バプテスト連盟の加盟教会のひとつである日本バプテストキリスト教日白ヶ丘教会は、2012年春、教会宣教100年を記念して記念誌を発行した。その中心的な作業は教会の「歴史部門」によって担われ、写真や古い資・史料を駆使して編纂された労作であり、かつ初期の日本バプテスト史を知る上での貴重な資料である。教会堂の地下室には膨大な資料が保管されており、天野栄造の略歴もその中の『小石川バプテスト教會史 第1編』に詳しく記されている。

それによると、天野栄造は、1873(明治5)年10月10日、愛媛県西宇和島郡磯伴村字喜木津にて、天野円長の3男として誕生した。1887(明治19)年に小学初等科を出ると、地元の養蚕伝習所の伝習生となった。その後、南陽製糸会社に勤務しながら明倫館に学び、1890(明治23)年4月には大阪商船学校へ、翌1891(明治24)年には上京して明治法律学校(現明治大学)に進学した。また同時に、鉱山学、測量学をも修得した。1894(明治27)年、官

3 本稿で言及されている「バプテスト」は、特別の説明がない限り、現在の日本バプテスト連盟の前身である「日本バプテスト西部組合」を指す。

吏として福岡県に赴任し、同県にあった大分炭鉱開鉱に携わることになった。翌1895（明治28）年、伊勢ヶ谷採鉱株式会社支配人就任を皮切りに、山口県生雲銅山の開坑監督、台湾沙金採取株式会社採鉱部主任（明治31【1898】年）、熊本県神瀬鉱山技師（1900【明治33】年）、清国広東総督府鉱山部技師（1902【明治35】年）、長崎県松嶋炭鉱監督兼買炭主任（1904【明治37】年）を歴任し、同年6月に第六師団付属軍法会議議員となった。最後の職は、日露戦争時の軍法会議議員としての出征である。

このような若き日の天野の目まぐるしい遍歴を、『小石川バプテスト教會史』は「何等一定不變の方針も定見なく、貴重なる青年時代の数年をば半通半可の有邪無邪なる無為」と表現しているが⁴、その天野が「一定不變の方針・定見」らしきものを持つようになるのは、軍法会議議員時代であるらしい。『小石川バプテスト教會史』によれば、出征先で軍に物品を調達する、いわゆる「御用商人」に遭遇し、その結果、軍法会議議員を辞し、自身も軍の食糧を司る御用商人に転身し、1907（明治38）年には、第四師団、第六師団、第七師団、並びに騎兵旅団第三軍糧餉部付属の御用商人となった。日露戦争時、第四師団は奉天の会戦に出兵し、1937（昭和12）年には満州に駐屯。そこで盧溝橋事件、日中戦争に関わっているが、これについては第六師団も同様である。天野はそこで商才を発揮し、以後1906（明治39）年には奉天（現新京）で日清合弁の会社を興し、同時に釜山、馬山などの朝鮮半島の諸地域では雑貨店を経営して絶えず軍と接触を持って、軍の備品を扱う商売を手がけるが、その一方、現地での金、銀、銅の採掘、港湾警備業を担当するなど、この方面でも軍との関係を深くしていった。この天野の動向についても『小石川バプテスト教會史』の記述は厳しく、天野の神学校時代の友人の言葉として「天野氏の前生涯を見て、彼は人の魂を救ふべき（ママ）、神の器として到底成功すべき人ではないと思っていた」と記している⁵。

天野のキリスト教との出会いは、1907（明治40）年2月、下関で日本バプテスト東部組合の巡回牧師吉川亀（ひさし）の説教を通してであった。同年

4 『小石川バプテスト教會史第1編』、72頁

5 上掲書、74頁

8月18日、北部バプテスト宣教師ヒールによって下関の海岸でバプテスマを受け、下関バプテスト教会の教会員となった。そこで、佐藤喜太郎、後藤六雄など北部バプテスト宣教師によって信仰訓練を受けた日本人伝道師の薫陶を受けた。この両名は、南部バプテストの宣教師が九州で活動を開始した当時、右腕として宣教師を助けた人物である。つまり、南部バプテストの日本伝道の初期を支えたのである。天野はバプテスマを受けて間もなく、伝道者となる訓練を受けるために、1909（明治42）年に南部バプテストによる福岡バプテスト神学校へ入学した。

2. 小石川バプテスト講義所の誕生と天野栄造

目白ヶ丘教会の歴史は1911（明治44）年から始まるが、天野栄造は初期の約20年間、目白ヶ丘教会の牧師であった。日本バプテスト連盟と歴史的に関係の深い米国南部バプテスト連盟による本格的な日本伝道は1889（明治22）年の宣教師派遣をもって始められ、翌1890（明治23）年以降は九州を日本伝道の拠点に定めて伝道活動を展開した。九州管内に限定された活動はそれ以後約10年間続くが、その地理的な限定を一気に飛び越えて東京での伝道活動が着手されたのは、現在の西南学院の母体とも言える福岡バプテスト神学校が、当時横浜にあった北部バプテストの横浜バプテスト神学校と合併し、「日本バプテスト神学校」となって新しく東京都小石川区（現在の文京区）開校したことに端を発する。この合併によって、福岡バプテスト神学校の神学生や教員は東京に移動したが、東京には南部バプテスト系の教会がなかったため、神学生が礼拝出席する教会として始まったのが「小石川バプテスト講義所」で、これが後年、紆余曲折を経て目白ヶ丘教会となる。「講義所」は今日の伝道所に近いもので、そこでは日曜日に礼拝のみが行われた。この小石川バプテスト講義所が、当時まだ神学生の身であった天野栄造の借家で始められたのである。

天野栄造が社会人として働いていた下関でバプテスト教会に通うようになり、そこでキリスト教に出会い、下関バプテスト教会でバプテスマを受け、

教会員となったことは既に述べた。天野の神学校進学には、天野に信仰指導をした佐藤や後藤が福岡バプテスト神学校の教員であったことも一因であろう。バプテストマの2年後、福岡バプテスト神学校に入学し、その3年後、1912（明治45・大正元）年に卒業するのだが、先に述べたように、福岡バプテスト神学校が合同して日本バプテスト神学校となったため、他の神学生や教員と一緒に天野も東京へと移動した。その後、天野は福岡の家族を呼び寄せて小石川に借家をしたが、そこに小石川バプテスト講義所が産声を上げたのである。

この講義所の開設は、神学校関係者が借家に住んでいた天野に懇望し、天野がそれを承諾しての開所ではなく、むしろ神学生であった天野の方から、福岡から来た神学生の「伝道練習所」として使ってはどうかと申し出て、それを神学校関係者が賛同したという経緯であった。当時の東京都下のバプテストの伝道は北部バプテストが占めていたので、講義所開設について北部バプテスト側に諮ったところ、「白山（現在の東京都文京区白山）以北ならば南部の伝道所としても良い」という返事であった。こうして小石川バプテスト講義所は始まったが、当初から教会学校をはじめとする伝道活動が盛んで、求道者も次々と与えられるなど順調な滑り出しであった。

天野は1912（明治45・大正元）年に日本バプテスト神学校を卒業すると、小石川バプテスト講義所の専任伝道者となり、翌年1913（大正2）年、南部バプテスト宣教師による新たな開拓地となった板橋バプテスト講義所開設と共に、その伝道者も兼務することになった。1918（大正7）年9月7日には按手を受け、伝道師から牧師となり、小石川バプテスト教会の初代牧師に就任した。天野は、1932（昭和7）年まで小石川バプテスト教会の牧師を務め、その後は広島教会へ転任する。それから5年後の1937（昭和12）年、満州伝道に従事するために海を渡った。その当時、すでに年齢は65歳に達していた。1930年代の男性の平均寿命は50歳強であったので、それから考えてもかなりの高齢になってからと渡満と言わざるをえない。

3. なぜ「満州」へ

そのような高齢に達していた天野栄造を満州へ赴かせたものは何か。バプテストの満州伝道について、1959年出版の『日本バプテスト連盟史1889-1959』は次のように記す。

行橋、宮崎の開拓伝道に引続いて、わがバプテストによつて（ママ）企てられた画期的伝道は鮮、満、特に大連伝道であった。右は昭和十年四月、長崎で開催された第三十三回年回で伝道部によつて（ママ）正式に提議、可決されたものであった。実はこの年の一月、来朝したマドレー、ウエザースプーン両博士の示唆、即ち「是非外国伝道を計画されたい、そして満州伝道を考慮されたい。現在満州に一夫婦のバプテスト宣教師が居るが、満州には満州人の外、ロシヤ人、日本人の三種族が居るから日本人の伝道の為には日本内地の伝道協会が当たらねばならない」に基づくものであった⁶。

この記述によれば、満州伝道は日本人バプテストの自主的な発議ではなく、その年の初め日本を訪れたアメリカ南部バプテスト連盟の使節が、「満州在住の日本人の伝道は、日本人のバプテストが行くのが良い」と勧められたことに拠るといふ。南部バプテストは、その10年ほど前から満州が位置する中国東北部で伝道活動をしていたが、1932年の日本による満州国建国以降、満州国内の日本人の伝道は日本のバプテストが行うべきだと考えたということである。議場はこれを「頗る重大」な問いかけとしてとらえ、「二分間黙祷、荒川直三氏に祈祷を長い度し」とある⁷。その後、満場一致で満州伝道は可決されるも、『日本バプテスト連盟史』はこの決議を、「蓋し、当時としては悲壮なものがあつた」と表現している。日本基督教団富士見町教会は、早い時期から満州伝道に関係しており、後に述べる満州伝道会が創設された教会であるが、その富士見町教会が所蔵している満州伝道会関連の資料によれば、

6 日本バプテスト連盟、『日本バプテスト連盟史 1889-1959』（昭和34年）、432頁

7 上掲書、432頁

1934（昭和9）年の満州伝道会の報告に、大連を「満州の玄関口」とあるので、「五族協和」、「王道楽土」の満州の玄関口たる大連の伝道は、当時の日本のキリスト教界にとって大きな期待と可能性を備えたものであったことがうかがわれる。

アメリカ南部バプテストの使節が日本人による満州伝道を勧めた翌年の1936（昭和11）年、西部組合の年次総会では、同組合伝道部より「満州伝道実施実行案」が提案され、次のような計画が提議された。①満州伝道を進めるにあたり、まず大連から始め、その後新京、奉天、ハルビンへと北上して広げたい。②必要費用は年額3000円で、牧師給、伝道費、住宅費等にあてる。③収入は、基本的に現地大連の信徒の約束献金、有志による特別献金、牧師子女教育費撤廃、主事費一部を削減（1560円／年）して捻出する。

次は派遣する人物の問題であるが、1937（昭和12）年の年次総会は、天野栄造を初代宣教師として派遣することが満場一致で可決された。そのために、宣教師ギャロットが「現地の視察を行い、当時広島教会牧師であった天野栄造に伝道者としての説得を行った」という記録がある⁸。なぜ天野であったのか、その理由は記されていない。年齢的には、今更外地の開拓伝道でもなかりうと思われるが、恐らく、過去に中国で軍関係の仕事をしていた天野の経歴から、大連駐留の軍関係者との人脈を期待され、それが伝道に有利に働くとの判断も小さくなかったのではないかと考えられる。

4. 満州伝道と天野派遣に関する国内バプテストの受け止め方

国内の教会は、日本のバプテストによる満州伝道をどのように受け止めていただろうか。天野と関係の深い小石川バプテスト教会は次のように述べている。

この時にあたつて（ママ）、わがバプテストに満州伝道の声を聞くは、我が意を得たる喜びであり、隣人に主の聖名を知らしめんとする使命を地の極にまで基督の証人として戦ふ時期を聖霊に満たされる時を期待されるのである。朝鮮へ、満州へ、或いは南洋へと伝道の道は限りなく広げられている。……満州の同胞の上に、大いなる教訓と導きをたれ給わんことを⁹。

好意的な論調であるが、これは自分たちの元牧師天野栄造が宣教師に抜擢されたこととは無関係であるように見える。なぜなら、ここには一度たりとも「天野栄造」の名前が登場していない。小石川教会の刊行物に満州伝道と天野栄造がセットで出てくるのはそれから7ヶ月後のことで、次のように記されている。

今般、自ら進んで満州伝道の大任を帯びられ、…尚、先生の伝道を後援する、満州伝道後援会が、組合の中に組織され、広く全国的に会員を募ることになりました。賛助会員（1口）50銭以上、維持会員（1口）1円以上¹⁰。

このように目白ヶ丘教会は、大連伝道をその初めより積極的に支援したようである。その理由は日本による満州国建国という社会的要因ばかりではなく、その時期に目白ヶ丘教会牧師となっていた熊野清樹の存在も大きかったことが想像される。それについては後に改めて触れることにする。

再び『連盟史』に戻ると、1937（昭和12）年次総会において、日本のバプテスト最初の海外伝道師として派遣される天野の就任式が執り行われたが、そこで連盟関係者は天野に次のように檄を飛ばす。

満州国は我が日本の生命線である。第一・国防生命線、第二・経済生命線、第三・人格生命線であつて、第一は軍当局に、第二は経済家にゆだね、第三人格生命線には我等宗教家たるものが赤誠を以て協力ご奉公する¹¹。

9 小石川バプテスト教会『栄冠』第10号（1936年11月15日）

10 上掲書、第17号（1937年6月）

当時の西部組合理事長下瀬加守は、「満州人，中国人と仲良くやりなさい。そして、われわれが愛していることを伝えなさい」と激励したと、臨席した南部バプテスト宣教師は記している¹²。下瀬をはじめとする当時の西部組合指導部の天野に対する激励は、1907年設立の南満州鉄道の初代総裁後藤新平（1857【安政4】年-1929【昭和4】年）が、就任の表敬訪問に訪れた日本基督教会伝道局監事（貴山幸次郎）に述べた内容と酷似する。貴山の「台湾におけるが如く満州に於いても我日本基督教会伝道局は率先して各地に教会を設け、同胞教化に努めます」との挨拶に、後藤は「台湾でもよくやって貰ったが、満州でも大いにやって貰いたい。只我々が威圧圧迫する斗りではいけないから、君等宗教家が愛の手を伸ばして親善の道を能く示して貰い度い。」と返した¹³。天野の大連赴任は1937年であるので、下瀬らの激励にあるような中国伝道に対するキリスト教会の姿勢は、当時の植民地政策と対を為す仕方で、すでに広く受容されていたと言える。

5. 天野の満州伝道

天野栄造は妻と4人の娘をつれて1937（昭和12）年4月に大連に到着し、5月2日に最初の礼拝を行っている。10名の出席があったが、その全員は東京、横浜、小倉ですでに信仰に入っていた信者であった。その月の終わりから月1度、3日間の特別伝道集会を行い、第1回目の特別伝道集会では16名の決心者が与えられた。自宅兼教会堂は「聖徳街3丁目9番地」という市内中央部に位置していた（資料2）。そのころの様子が「大連便り」に次のように記されている。

11 『日本バプテスト連盟史 1889-1959』, 433 頁

12 F. Calvin Parker, *The Southern Baptist Missions in Japan, 1889-1989* (New York: University Press of America, 1991), p.130.

13 中村敏『日本プロテスタント海外宣教師 - 乗松雅休から現在まで』（新教出版社、2011年）、56 頁

無い物づくしの教会 - 5月2日に生まれたばかりの教会で自立独立してない。会堂兼牧師館の借家住居。地の利も得ていない裏町通である。伝道開始の準備金として一銭もない。裸一貫とは正しくバプテスト満州伝道のスタートである¹⁴。

天野の伝道活動は順調に進み、教勢も伸びて、その年の12月には早々と「大連バプテスト教会」として教会設立式が行われるまでになった。式には、当時の西部組合理事長下瀬加守、理事としてギャロット、主事の黒田、三善敏夫伝道部長が代表として参列した（資料3）。市内では、時を同じくして南京陥落の奉祝提灯行列が行われていたとも報告されている¹⁵。つまり、日本軍が中国大陸で破竹の勢いで攻め進んでいる最中の極めて羽振りのよい時機に、バプテストは満州に牧師を派遣し、教会を立てたということである。翌1938（昭和13）年、時の満州国特命全権大使（植田謙吉）によって教会に公の設立許可がおりるも、付帯条件が付けられた。その付帯条件とは、2年以内の教会堂新築である。このため、国内では東部組合に呼びかけて東亜伝道後援会が組織され、毎年400円の援助が取り決められた。1939（昭和14）年の時点で、大連バプテスト教会は満州国で唯一の日本人によるバプテスト教会であり、教会員も40名に増えている。もっともこれは、改革派教会18教会、教会員2,408人、メソジスト教会8教会、教会員1,007人、南部バプテスト6教会、24伝道所、教会員2,225名に比べれば、実に微々たる教勢であった。

こうして始まった満州伝道であったが、間もなく、それも突然の教会解散となっている。『日本バプテスト連盟史』によれば、「時局の変化に伴い、昭和15（1940）年、東西（バプテスト）両組合合同を機として、日正による東亜伝道会へ合流し、各派合同の魁を示すこととなった」とあり、ここで大連伝道の記述は終わっている¹⁶。ここで語られているのは、天野栄造のサポート

14 『日本バプテスト連盟史 1889-1959』, 434 頁

15 上掲書, 437 頁

16 上掲書, 437 頁

のために発足した後援会が、その早い時期に「日正」という人物によって始められた「東亜伝道会」に合流したために廃止され、それに伴って「大連バプテスト教会」も解散したというのである。加えて、東西バプテストの「合同」が「各派合同」、すなわち日本基督教団誕生の魁となったと述べるのだが、これはすこし身内鼻頂の書き方であるように思われる。確かに西部組合の働きとしての大連伝道は終止符が打たれたが、実際、大連における天野の活動はそれ以後も続いており、それに当時のバプテストが関係している。天野栄造のその足取りを、先に記した富士見町教会所蔵の「満州伝道會報告書」より明らかにしてみる。

6. 満州伝道会の誕生

満州伝道会は、1933（昭和8）年、「満州人教師をもって、満州語により、満州国人に伝道する」超教派の信徒主体の組織として、日本基督教会富士見町教会（現日本基督教団富士見町教会）の教員有志によって発足した¹⁷。中心人物のひとり日は日正信亮で、牧師であった三好務も発足に関わっていたが、あくまでも富士見町教会会員の有志による活動であった。

日正信亮（1858-1940）は、現在の和歌山県海南市の日蓮宗の家に日正文七の3男として誕生し、陸軍士官学校、陸軍経理学校卒の軍属で、陸軍歩兵少尉、歩兵中尉を歴任後、主計課に配属された。1904（明治37）年には第4軍兵站経理部長の職にあり、満州軍倉庫長在任中には日露戦争へ従軍している。その後、1906（明治39）年に第六師団経理部長、1909（明治42）年に第一師団経理部長となり、その後、主計監、朝鮮駐劄軍経理部長を歴任し、1914（大正3）年予備役となる。このように日正は、近代日本が経験した主要な戦争に軍属として関係していたことになる。自らの軍属の立場と権限を

17 この文言は満州伝道会規約の原案文であるが（韓哲曦「満州伝道会の成立と展開」〔同志社大学基督教研究会編『基督教研究』57(2)〕、147頁）、正式な規約では「本會ハ滿洲國ニ於テ滿洲人ニ對スル基督教ノ傳道ヲ目的トス」とされた（富士見町教会所蔵『満州伝道會報告書【3】』（1935【昭和10】年3月）、6頁）。

用いて、日正は周辺諸国におけるキリスト教伝道にも熱心であった。1904（明治37）年の日露戦争期には、大連・満州倉庫長として日本軍60余万、馬43万5千を統括する地位にあったが、その立場をフルに用いて大連の軍部勤務のために日本からキリスト者と呼び寄せ、軍施設における主日礼拝、祈祷会を担当させた¹⁸。「御用商人」として軍関係の、それも食糧関係の仕事を請け負っていた天野榮造との接点もこの時であったものと想像される。日正は日清戦争時には台湾に赴任していたが、そこでは諸教派合同の軍人慰労会のために牧師たちを各地に派遣、教会門安を企画し、後の日基台湾伝道の基礎を作った。

再び大陸における日正の活動に戻ると、義和団事件（1900【明治33】年）の際に清国駐屯軍司令部として天津に赴任していた日正は、日本基督教伝道局に掛け合い伝道開始と伝道者の派遣を要請し、後の天津教会開設の先鞭をつけた。同じようにして日露戦争後、直ちに大連教会設立を要請し、1905（明治38）年12月16日に設立された日本基督教大連教会の強力な推進力となった。満州伝道会発足の富士見町教会での活躍は1914（大正3）年の予備役後のことである。

日正信亮は、天野以外にもバプテストと人脈のある人物である。天野の後任として目白ヶ丘教会牧師に就任し、戦中・戦前にバプテストの指導的立場にあった熊野清樹（1890—1971）は、薬学を修めて病院で働いていた青年期（1907【明治40】年）に「当時第6師団経理部長」であった日正信亮と出会っている。教育熱心な日正は、公務の傍ら、自宅に青年を集めて信仰指導の集まりを開いていたが、熊野もその中のひとり、日正より熱心に伝道され、母親と共に信仰に入ったという¹⁹。

伝道心旺盛な日正が中国伝道に関心を寄せ、現地の一般事情、現地における軍の仕組みや軍の経済に関する知識と経験を駆使して、教会の有志と共に満州伝道を支援する団体を作ったことは自然の流れとも思える。富士見町教会所蔵の「満州伝道会規約」を見ると、本部は富士見町教会に置き、会員は

18 韓, 149頁

19 『日本バプテスト連盟史 1889-1959』, 437-440頁

毎月1口1円50銭とある²⁰。陸軍主計少将の日正が中心の団体であるためか、金銭の収支は極めて厳正で、振込方法も一切の振込を郵便局の振替口座以外は認めなかった。時に送金が遅れることがあっても、一貫してこの振込方法は貫かれた。同時に帳簿も細かく記された。

既述した設立目的に沿って、次のような具体的な目標が掲げられ、「①東亜新秩序の建設に於ける文化工作の基本としての教育機関設置の必要。②支那における欧米的基督教機関に対して、日本の基督教教育機関設置の重要性」とある²¹。この目標は中国人受洗入会志願書にも反映され、受信者の姓名、年齢、籍貫、現住所、永久地址、職業、家族、教育等の記載に加え、「身分調査」という欄があり、そこにはほとんどが「東亜和平主義を愛好せる親日家なり」と記されている²²。このような記述は、天野の大連派遣を喜ぶ当時のバプテストの心情、すなわち「隣人に主の聖名を知らしめんとする使命を地の極にまで基督の証人」にも重なるように見える。

その後、満州伝道会は草創期(1933・6～35・3)、教区分割期(1935・6～37・12)というように段階的に発展してゆく。天野栄造が大連で活動した時期はその中の「教区分割期」にあたり、全満州に一気に伝道地域が広がり、内陸部(熱河方面)にまで拡大した時期と重なる。この拡大は、1937(昭和12)年の盧溝橋事件をきっかけに、日本が中国と全面戦争に入った社会的な出来事とも並行している。中国との全面戦争に突入した後、満州伝道会は名称を「東亜伝道会」と改称し、そこから中国全土に伝道範囲を広げるに至っているからである。そのような状況下では、時の勢いに便乗するかのようには複数の教派が満州伝道着手に名乗りをあげ、伝道への熱意も活気を帯びたが、興味深いことに教派を超えた「超教派」の働きは活発ではなく、もっぱら自らの教派活動を全面に押し出す者、満州伝道会の設立趣旨とは異なる教派の参入も起こって来た。

富士見町教会には東亜伝道会と名称が変更した後の満州伝道の記録も所蔵

20 『満州伝道會報告書【4】』, 4頁

21 筆者による富士見町教会資料からのメモ

22 同上

されている。その資料には、天野栄造は東亜伝道会から定期的に、それもかなり高額の支援を受けていたことが記されている。1937（昭和12）年11月の「北支伝道文書」の「各地送金表」には「大連新教会（天野）200」とあり、200円の経済支援を受けていたことが記されている。この額は増額された額のように、「160」という数字が棒線で消されての金額である。また鉛筆書きで「天野100。 家賃50」とあり、同地区（南満教区）14教会・伝道所内で、高額に入る額が支給されている。同時に「収入見込み」という記帳もあり、「バプテストを含む日本国内の10の教派から100円以上の献金があるであろう」と記されている。このことは、バプテストが教派団体としてまとまった額を東亜伝道会に献金していた証拠であるので、具体的には天野への経済支援であることには間違いはない。とすれば、先に紹介した「大連便り」の「伝道開始の準備金として一銭もない」には、多少の誇張が含まれているように思われる。

東亜伝道会による天野への支援はその後も続き、1939（昭和14）年5月31日には、千葉勇五郎（14年5月より6ヶ月分月額50円也）300円、当時の目白ヶ丘教会牧師熊野清樹が5～12月分として合計400円を献金している。翌1940（昭和15）年度は1月分より「日本バプテスト教団」として毎月100円の献金があった。この年から日本のバプテストが教派合同をして日本基督教団に参加しているので、「日本バプテスト教団」となった後も天野支援の献金が東亜伝道会へ送られていたということになる。事実、東亜伝道会からの天野への送金は月額160円であった。これは最高額183円（熱河・福井）に次ぐ額である。この年の6月5日、天野へ400円という多額の支出が記載され、用途には「修繕費」とある。

7. 大連における「天野問題」とその後の天野栄造

実はこの年、東亜伝道会と天野の間に深刻な対立が起っていた。その結果、その年10月には現地代表理事であり、満州伝道会草創期から日正信亮の右腕として中心的な働きをしていた山下永幸が辞任に至った。時を同じくしてそ

の翌月11月には日疋が急逝し、これ以後次第に東亜伝道会の働きが低下し始める。

この前後の顛末が、富士見町教会所蔵『東亜伝道会日誌』に記されている。それによれば、1939年の12月、バプテストの代表者が、バプテストの大連伝道を「条件付き」で「東亜伝道会」と改称した旧満州伝道会に引き受けてほしい旨の要望をしたとある²³。その後、年明け1940年1月に、バプテスト側と東亜伝道会の間で協力に関する「日本バプテスト教会並に東亜伝道会との協力に関する件」の覚え書きが交換された。そこれが『日本バプテスト連盟史』が記している「時局の変化に伴い、昭和15年（1940）、東西（バプテスト）両組合合同を機として、日疋による東亜伝道会へ合流し、各派合同の魁を示すこととなった」に係する出来事であろう²⁴。バプテストは日本基督教団の一部となるので、自分たちだけで独立して満州伝道を支援することの困難を予想してのことであろう。その条件の内容は以下の通りである²⁵。

- ①大連バプテスト教会を東亜伝道会大連教会と改称する。
- ②教会の信仰、儀式等はすべてバプテストの伝統による。
- ③牧師・伝道師はバプテスト派の者を将来も採用する（在任者を故なくして解任せざる事）。
- ④経済は日本バプテスト教会より毎月金100円、東亜伝道会より毎月60円を補助する。
- ⑤東亜伝道会は満人に対する伝道を高調し居る会なるにより、今後大連教会に於いても満人に対する伝道を実行努力する。

東亜伝道会側はこれを条件に天野と大連バプテスト教会を受け入れ、大連バプテスト教会側も翌月2月の教会総会でこれを承認し、以後、東亜伝道会

23 その代表者は、熊野清樹、渡部元であった（韓哲曦、『日本の満州支配と満州伝道会』、日本基督教団出版局、1999年、121頁）。

24 『日本バプテスト連盟史 1889-1959』、437頁

25 富士見町教会所蔵『東亜伝道会日誌』、韓、『日本の満州支配と満州伝道会』、121頁

の伝道方針に従うことを正式に表明した。ところが、天野本人はこの条件を遵守しなかった。教会名は変更せず（満州基督教新教会）、「満州人に伝道する」という東亜伝道会の方針に従わず、依然として満州在住の日本人相手に伝道するといったように、「受け入れ条件」に外れたことを多々行っていた。現地責任者の山下永幸はこの対応に苦慮し、東亜伝道会立ち上げの中心人物であった日疋信亮に訴えるも、日疋は両者を調停し、天野の容認を山下に申し入れる始末であった。それについて日疋が山下に次のような手紙を送る²⁶。

バプテストは満州にて天野牧師を中心として独立して伝道したい。他の教区にははいりたくない。大連を発起として奉天、新京、ハルピンを貫いて、バプテストの精神を以てやりたいとの事であった。

この希望は、天野と日疋の間では「大賛成」の合意を得ていたもので、その内容は、天野は東亜伝道会に合同するも、自分たちの主張は貫くと言うものである。実際天野は、1942年には東亜伝道会内部に「満州新区会」という自分たちだけの新しい会を作っているのが、現地責任者からすれば、天野は「頭痛の種」であったに違いない。このように東亜伝道会の本部責任者山下永幸と天野の間には、天野が東亜伝道会に加入した当初から不協和音が響いていたことが読み取れる。しかし山下は、日疋を安心させるかのようになり、天野問題について次のような手紙を送った。

天野牧師の件、……今後天野氏の御計画には善隣関係をもち、なるべく接近しません。天野氏の御自由にまかします。ご安心下さいませ (1940.4.2)。

しかし、この「天野氏の御自由」は度を越すようになる。すでに述べた東亜伝道会との約束事を遵守しないばかりか、たびたび経費の増額を要求し、その使途内容は、受け入れ条件の「満人に対する伝道を実行努力」からは

26 以下の日疋、山下の書簡は富士見町教会所蔵『東亜伝道会日誌』、および韓、『日本の満州支配と満州伝道会』より。

逸脱しているとしか言えないものであった。山下から「安心して下さい。天野氏にはなるべく接近しません」と書かれた手紙を受け取った約1月後、天野擁護に回っていた日疋は、「満人伝道に力を注いでほしい。豊表替えなど日本人の座るためではないか。備品など入れるには熱心だが満人伝道に力を入れているとは思えぬ」という厳しい内容の手紙を天野に書き送っている。

期を一にするかのように、現地の山下からも次のような報告が日疋に届けられた。

大連は昔の通り日本人伝道のみ。満人に対して何もしていない。奉天其の他には東亜伝道会入会以来一回も巡回していない。補助金160円では何もできんと。……新教会と名付けて大理想、大計画でも行う満基の新派のような触れだして基督教新聞にも記載し、満基のものの神経を刺激したが、実はまだその看板もかかっている。満州語のわかる伝道者もいない。それもこれも経費不足、会長に出している修繕費などの経費の送金を願ってくれとのことでした²⁷。

このような経費要求をたびたび寄せ、山下を悩ませていた当の天野自身は「満人に対して何もしていない」との批判に対して、次のように自らの正当性を訴えた。

ただいま満州人に対し直接伝道はしていないが、沙河口に家賃30円の伝道所を作り、満州人を月50円に入れ、ベンチ10個150円、教壇25円で購入して活発な伝道を始めれば、各方面の満州人伝道に大きな助けとなると思う。

27 富士見町教会所蔵『東亜伝道会日誌』、韓、『日本の満州支配と満州伝道会』、123頁

天野は新たな送金を直接日正にも頼む始末であった。これが7月の日付であるが、日正はこれに返事をしなかったらしく、翌8月再び日正からの返信を求めている²⁸。

翌1941(昭和16)年度]の「各地送金状態(送金許可証)」によれば、日本バプテスト教団が1～5月分1,200円を献金している。天野への献金は月額200円となり、これも個人への支出としては依然として高額の部類に入る。しかし、この年の11月以降、天野への支出の記録は一切見当たらないため、天野の教会活動は事実上停止したものと想像される。実際、この年の年末、天野は帰国して別府市におり、翌1942(昭和17)年の4月までは大連に帰らないとの意志を本部にはがきで知らせている。そして突然、9月2日付けで突然辞職願を提出し、10月に帰国するとして一方的に大連を引き払っている。引退の理由は明らかにしていないが、その年の11月に開かれた日本基督教団第四部会大会(第4回、日本バプテストとしての最後の大会)に「大連教会解散に関する報告」がなされているので、天野の大連撤退は、バプテストの教団加盟に何等かの関係があったことが推測される²⁹。

帰国後の天野の動静は『富江バプテスト教会史稿』に詳しい。それによれば、天野の大連教会牧師辞任引退は1942(昭和17)年10月とある。1948(昭和18)年8月13日から約1月、長崎県富江に滞在し、9月5日には富江教会で主の晩餐式を執り行うなどし、同26日の夕礼拝を最後に天野の名前は教会の記録から消えている。富江教会来訪のきっかけは、天野の妻の実家が上五島若松村というところにあつたためであろうと思われる。天野栄造は、1935(昭和20)年7月30日、五島で没した。

28 韓, 上掲書 123 頁

29 この大会の主要議題は神学校廃止、部制廃止に対応する事後処理であった。記録では、(4)「教会・伝道所・学校・団体の改廃」の議題があるが、そこで天野の辞任並びに大連における教会活動の報告がなされたか否かは定かではない(『日本基督教団史資料集第2巻』にはその記載はない)。ただ「教師扶助の件」では、教団の謝恩金制度の説明が菅谷仁より、(3)「昭和18年度伝道案に関する件」の説明は青柳茂よりなされて、そこで「(イ)日本基督教団の伝道方針に立脚し、支教区の伝道案に応じ…」とあるため、東亜伝道会が教団の部署となれば、天野単独の活動の余地は皆無となる。

8. 学ぶべきこと

東亜伝道会は、日疋の死後から3年目の1943年、日本基督教団「東亜局」となって発展的解消を遂げ、以後、東亜伝道会の遺産を受け継ぎ、当時の国策である「大東亜共栄圏」の建設を担うことになった。天野の大連教会はその時点で解散扱いになっているので、バプテスト自前の満州伝道もそこで終了したことになるが、その代わりに、新規に日本基督教団として国策に沿って戦中を生きることになる。

バプテストは、天野の満州伝道派遣の際、「この時にあつて、わがバプテストに満州伝道の声を聞くは、我が意を得たる喜びであり、隣人に主の聖名を知らしめんとする使命を地の極にまで基督の証人として戦ふ時期を聖靈に満たされる時を期待されるのである。朝鮮へ、満州へ、或いは南洋へと伝道の道は限りなく広げられている。……満州の同胞の上に、大いなる教訓と導きをたれ給わんことを」と祈って送り出し、献金もした。確かに、純粋な伝道の熱意に動かされた敬虔な信仰の発露でもあったであろう。

しかし、たとえそうであったにしても、そのような純粋な伝道への熱意の言葉が、どのような歴史的・政治的状況の中で語られた言葉であったのかという分析は必要であろう。天野派遣の際の連盟指導者の言葉、「朝鮮へ、満州へ、あるいは南洋へ」出て行って、その地の「隣人に主の聖名をしらしめんとする使命」という時、送り出す側は「隣人」と呼ぶその地の人々をどのように位置づけていたのか。それについて戦時下に熱河へ赴いた日本人伝道者に関する論文で荒井英子は次のように述べている。

「み言葉を述べ伝えなさい。折が良くても悪くても励みなさい（Ⅱテモ4・2, 新共同訳）、熱河伝道者は文字通りこの命令に従って、いのちがけで伝道した。悪いのは「折」であって自分たちではない。そこに見えるのは「折」と切り離された「伝道史上主義である。自らがおこなった伝道が歴史的にどのような文脈にあり、どう機能していたのか。そのことを半世紀経てもなお神の前に自己相対化できない信仰とは何か³⁰。

これは「教会の伝道（宣教）」というテーマにおける「歴史の捉え方」、「歴史認識」の問題であり、宣教論の重たい課題である。これはまた、今日もお近隣諸国との間に横たわる一触即発の私たちの国の先の戦争に対する責任の問題とも繋がってくる。改めて、教会と信仰者の戦争に対する責任が記憶され、問われることが求められる。政教分離と信教の自由を標榜する私たちバプテストであれば、これはなおさらのことであり、後から来る人たちに対する私たちの為すべき務めであると自覚する。次の荒井の言葉は、その私たちに対する叱咤と激励であろう。その一文の紹介を以ってこの拙論を閉じたい。

戦後和解につながるキリスト教界の「悔い改め」は、いのちの尊厳に立脚した自己相対化の作業を地道に続けることからしか出発しないであろう³¹。

30 荒井英子、「伝道者たちの言説における戦争『被害者』の不在」（渡辺・張・荒井『日本の植民地支配と「熱河宣教」』（いのちのことば社、2011年）、103頁

31 同上

資 料 1

皇紀2600年奉祝全国基督教信徒大会

大会プログラム

開会の宣言

国歌斉唱（君が代）

宮城遥拝

黙祷

祈祷

二千六百年の昔に、神武の御門が大和の国をはじめ、皇国の基をすえたまいしことを感謝し奉る。爾来二千六百年の間、列聖相繼いで皇国を知し召し給い、大八洲の民草広く深くその御恩に与かりしことを感謝し奉る。将士に一死報国の精神をあたえ、真にあなたの息子息女となることを得しめ給え。斯くすることに由って大君の赤子にふさわしい者とし、皇国の民草としての忠誠を全うさせていただきますように。

説教

日本のキリスト教徒は新天新地の黙示を見ている。皇紀二千六百年の皇運を喜ぶ集まりであると共に、日本のキリスト教の歴史におけるペンテコステである。教会合同の黙示は、日本独自の神の恩寵である。

祈祷

一心一体祖国の使命達成のために、御国建設の為に、我らの身も魂も尽くすことをゆるしてください。新しき天と新しき地を地上に実現する者となることができるように。

奨励「献金の趣旨」 真鍋頼一

日本においてキリスト教徒の為すべきことは、大東亜建設の事業である。

感謝祈祷

東亜大陸における伝道事業の為に献金を用い、実を結ばせ給わんことを切に祈る。

式辞 小崎道雄

本日全国にあるキリスト信徒相会し、茲に皇紀ある二千六百年を慶祝するの機会を得たことを感謝する。我国が肇国の古より八紘一字の精神に則り、親展に親展を重ね今日の隆盛を来たしましたことは、是れ偏えに天佑を保有し給う万世一系の天皇の御稜威と、尊厳無比の国体に基づくものであり、この聖代に生を受けたことは感激に堪えない。日本のキリスト教が宣教わずか70年にして今日の進歩を見るに至ったのは、信教の自由を保障したまいし明治天皇の恩による。東亜における指導者として責任を大きさを痛感し、この大使命を全うする為に人力の限りを尽くすのみならず、神に対する信仰を盛んならしめねばならぬと信じる。

皇紀二千六百年奉祝全国基督教信徒大会宣言（宣言朗読）

神武天皇国を肇め給いしより茲に二千六百年
皇統連綿として爛々光輝を宇内に放つ此栄ある歴史を懐うて
吾等転た感激に堪へざるものあり
本日全国にある基督教信徒相会し度んで
天皇陛下の万歳を寿ぎ奉る
惟ふに現下の世界情勢は
極めて波瀾多く一刻の偷安を許さざるものあり
西に歐洲の戦禍あり東に支那事变ありて未だ其終結を見ず
此渦中にありて我国は能く其針路を謬ることなく国運国力の進展を見つつまり
是れ寔に天佑の然らしむる処にして
一君万民尊嚴無比なる我国体に基くものと信じて疑わず
今や此世界の変局に処し国家は体制を新たにす
大東亜新秩序の建設に邁進しつつあり
吾等基督教信徒も又之に即応し教会教派の別を棄て
合同一致以て国民精神指導の大業に参加し
進んで大政を翼賛し奉り尽忠報国の誠を致さんとす
拠つて茲に吾等は此記念すべき日に方り左の宣言を為す

- 一、吾等は基督の福音を伝え救霊の使命を完うせんことを期す
- 一、吾等は全キリスト教会合同を期す
- 一、吾等は精神の作興道義の向上生活の刷新を期す。

右宣言す 昭和15年10月17日

奨励

松山常次郎の奨励。神武天皇が大和を御平定遊ばされましてより今日に至りまする迄、大陸の文化に接して我国独特の文化を建設し、王政維新の時には西洋の文明と接触して開国進取の国是を定め、明治天皇の御統率の下に国運隆々として今日に至った。東亜の諸国の指導的地位を確立するに至ったことは誠にお互いに喜ばしく存する所である。近衛内閣の新体制は精神運動であると見ている。明治以来の科学万能主義や功利主義は文明建設のために効果はあったが、弊害も現れてきた。そのため理想主義に対する要求が起り、まず日本精神運動が起り、次に新体制運動が起こった。これは精神運動であるからキリスト教は新たに重大なる任を負わされた。即ち、精神、真心がなければ、新体制運動は成功しないと思う。東亜の新秩序の建設、日満支三国の親善提携によって東洋の平和を確立するのであり、精神的紐帯としてキリスト教が必要である事を深く感じる。国内伝道の充実、東亜伝道の拡大にクリスチャンは大いに力を要する。全国三十万のクリスチャンがその力を結集して、この大いなる使命に向かって突進しなければならない。ここに我々は教会合同の必要を感じる。教会合同の力を以て新たにこの使命に向かって突進しなければならない。伝道報国の大いなる責任を感じており、皇紀二千六百年の大会において、伝道報国の一大決心をしたい。

資料 2





* 「聖徳街3丁目」は、大連駅から「星ヶ浦」に向かって市電に乗り、「聖徳街3丁目」停留所で下車して進行方向左側に降りて歩いていった地域を指す。



資料 3



大連バプテスト教会設立式（1937年12月）（西南学院所蔵）